

# デンマーク体操の歩み (1)

—17 世紀～ 19 世紀—

高井久光      工藤亘

玉川学園・玉川大学  
健康・スポーツ科学研究紀要  
第 15 号

## ■研究資料■

# デンマーク体操の歩み（1）

-17世紀～19世紀-

高井久光\*1 工藤 亘\*2

### 要約

17～19世紀にかけ、デンマークにおける身体文化や体操の歴史的背景と歩みについてまとめた報告である。当時の体育教師の役割や国民啓蒙運動とフォルケホイスコレ、射撃運動とボランタリー体操の発展に触れるものである。

### 1、17～18世紀の身体文化と社会

当時のデンマークは他のヨーロッパ諸国と同様に封建的社会であった。王室、領土、官僚、大商人、大地主などごく一部の上流社会の人々と金持ちがほとんど全ての農地と富を所有し国を支配していた。

1733年には、兵隊と農業労働力を領主が確保できるように、領民を強制的に領地に留める制度「土地緊縛法」が制定された。1800年にこの制度が全廃されるまで67年間、農民や農業労働者は束縛を受けた。彼らは、領主の農場では農奴として働かされ、自分の僅かな農地からは小作料や税金を取られ、その上徴兵にも従わなくてはならなかった。平民（農民と都市部の商人や職人）の暮らしは貧しく、毎日の食べ物を確保するのに全精力を使い、身体運動をする時間もエネルギーもなかったであろう。

封建社会の底辺にいる人々の身体文化は収穫祭などでのフォークダンスや棒や石を使った子供の遊戯程度であった。一方、上流社会の人々の身体文化は、乗馬、狩猟、フェンシング、ダンスなどであった。彼らは、身体運動の喜びとその効果を体験から知っていたであろう。デンマークにおいて、体操教育の必要性を熱心に主張し実践したのは、レーヴェントロウ伯爵ら上流社会の人々であったこともうなずける。

17～18世紀は、科学思想に決定的な変化をもたらした時代である。1687年には、ニュー

トンの有名な「自然科学の数学的原理」が出版され、自然科学に法則が取り入れられた。コペルニクスやガリレオの著書に対するカトリック教会の禁書処置が解かれたのは、1835年であるが、地動説は公然の秘密として18世紀の人々に知られていた。C.ダーウインが「種の起源」を出版したのは1859年であるが、近代進化論が台頭し始めたのは18世紀である。

17～18世紀は、地球は宇宙の中心ではなく、太陽を公転する惑星の一つにすぎない。人類の祖先は猿のようであった、という認識が得られた時代である。それまでの思弁的な形而上学が否定され合理的な理性論と自然科学が台頭し始めた時代である。

自由、平等、寛容、博愛という思想が生まれた啓蒙時代と呼ばれるこの時代に輩出したイギリスの思想家 J.ロックとフランスの J.J.ルソーは、身体文化の発展に重要な影響を与えたとされる。「子供の躰は、権威を尊ぶことを教えることではなく、独立した個人を育てることである」とロックは主張した。また、同時代の人々の自然と文化に対する考え方に計り知れない影響を与えたといわれる小説「エミール」などを著したルソーは、「カツラとコルセット」に代表される上流社会の人工的な身体文化を否定し、「自然に戻る」、つまり人間本来の自然な姿が表現できるような身体文化を求めた。

1760年から1780年頃の時期にその始まりを見るイギリス社会の工業化はヨーロッパ諸国

\*1 Århus 大学 \*2 玉川大学

に重要な影響を及ぼした。イギリス国内では、人口が増加したにもかかわらず、農業生産形態は麦からウールへと移行した。このことは、ヨーロッパ市場での麦の需要増という結果をもたらした。これに対応するため、まだ工業化時代を迎えていないヨーロッパ諸国は農業生産に力を入れた。

しかし、当時の農地所有構造における農業生産体制では需要増への対応が難しく、農業革命が求められた。ここで当時の支配者達の意見の対立が生じた。多くの大地主は保守的な考え方を守り、教育により平民の視野を広めることは不平不満をつのらせ、しいては革命的考えを持たせる恐れがあると主張した。

一方、前出の J.L.レーヴェントロウ伯爵に代表される開明的考えを持つ一部の大地主たちは、教育改革なくして農業改革はありえないと主張した。彼の兄 C.D. レーヴェントロウ伯爵は、当時 16 歳のフレデリック皇太子が 1784 年に開明政権を樹立したときの中心人物の一人である。フレデリック政権がまず取り組んだのは土地問題と農業改革であった。地主の小作人に対する刑罰が禁じられ、小作人は土地を奪われれば補償を受けられることになった。前出の「土地緊縛法」を廃止したのもフレデリック政権である。フランス革命前夜にデンマークでは農奴解放措置が混乱もなく採用されたわけである。そして、フレデリック政権を支える開明派貴族地主や官僚により平民教育が推進され、ここにデンマークにおける体育教育がその早創期を迎えたわけである。

## 2、18 世紀から 19 世紀初頭の体育教育

デンマーク人で初めて体育教師になったのは、J.L.レーヴェントロウといわれている。彼は、1767 年から 3 年間兄の C.D. レーヴェントロウと共に外国旅行をし、ドイツの博愛主義教育者 J.B.バセドーらその時代の先駆者達を訪問している。バセドーは世界初の博愛主義教育施設を 1774 年、デサウに設立した人物である。

J.L.レーヴェントロウも 1780 年頃、彼の領地ピラートロレボウに学校を創設し博愛主義教育を実践し、そこの授業に体育や音楽を取り入れた。「心と身体は優れた学校で形成されるべきである。」「平民の子供にとって運動は、農業の重労働により硬く動きが鈍くなった身体を柔軟で機敏な身体にするので特に大切である。」とレーヴェントロウは言っている。

この新しい学校に対する評価は賛否両論だった。「神の言葉は少ししか教えないで、音楽や天文学や体操を教え、百姓の子供達を駄目にし、結局は彼自身が破綻するだろう」という意見と、「彼は素晴らしい成果を上げている。百姓の子供達は、自由時間に物乞いするかわりに柔軟で機敏な身体をつくるために運動をしている。音楽は、子供達の性格を和らげ、余った時間を楽しく過ごすのに良い。」という全く反対の評価に分かれた。

なお、当時の人々が体操という場合、走る、跳ぶ、よじ登る、投げる、レスリング、泳ぐなどの運動を意味し、我々がいう体操とはかなり内容が異なる。

「人は身体と精神相互の力でより完全になる」という思想を教育の場で最初に実践した一人が前出のバセドーである。彼は、若い頃、1753 年から 61 年まで、デンマークに滞在し上流階級や官僚の子弟を教育する施設ソーゴイアカデミーで哲学、宗教などの講義をした経験を持つ。議論好きな教授であったといわれる。バセドーの弟子ザルツマンは、博愛主義に基づく教育施設をドイツのゴータ近郊に在る大農園シュネッフェンタールに創立した。1784 年のことである。この学校で、「体操教育の父」と呼ばれるドイツの教育者グーツムーツが 1785 年から約 50 年間教鞭を執った。彼が著した「若者のための体操」は、デンマークのフレデリック皇太子に捧げられた。その動機としてグーツムーツは、皇太子が実施した土地緊縛法の廃止やデンマーク領での奴隷売買の禁止などの功績をあげ、人権擁護者として

の皇太子を称えている。

コペンハーゲンの中産階級の人々が多数グーツムーツの本の出版費用を援助している。これは、当時のコペンハーゲン市民が博愛主義教育と新しい身体文化に強い関心を持っていたことを示す。彼らは、ラテン語とギリシャ語に偏重した教育をする官僚養成学校では実際に必要なことを学べないと主張し、現代語、自然科学、健康教育、体育などを教科とする博愛主義に基づく学校を設立した。

これらの学校の一つに宮廷牧師 C. J. R. クリスマニースによって 1794 年に設立されたクリスマニース・インスティテュートがあった。ここでは、グーツムーツ式の体操施設として約 2.5 ヘクタールの土地を購入するなど体操教育に力が入られたのである。この学校の非常勤体育教師として 1799 年に就任したのがナハテガルである。彼は、同じ年 1799 年に私立の体操研究所を創立し、子供たちに体操を教え始めた。この研究所が核となり体育教師養成を目的とする研究所が 1804 年には軍隊のために、そして 1808 年には民間のために設立された。いずれもナハテガルがリーダーに就任した。

ナハテガルはグーツムーツとも親交をもち、「若者のための体操」第二版出版にも協力している。博愛思想や中産階級的な考えを持った有力者がナハテガルを支持した。強兵への有用性から体操の発展に力を入れたフレデリック6世もナハテガルの支持者の一人だった。

ナハテガルが体操政策責任者であった 19 世紀前半のデンマークは、列強間の紛争に揺さぶられ多くの国家的危機に立たされた時代である。イギリス艦隊の首都コペンハーゲン攻撃(1807 年)、国庫の破産(1813 年)、キール講和条約(1814 年)によりノルウェーを失うなど、当時のデンマークは国防を最優先せざるを得ない状況におかれていた。このような時代にナハテガルは、グーツムーツの博愛主義に基づく体操と強兵という国家的な要求に基

づく体操を結合しようとした。

徒手体操を創立したスウェーデンのリングは 1799 年から約 4 年間コペンハーゲンに滞在し、当時の開明思想に親しんだ。また、フェンシングや体操を学び、ナハテガルの研究所も訪れているが、ナハテガルと個人的な親交を結ぶことはなかったようである。しかし、この 4 年間のデンマーク滞在が彼の後の業績に重要な役割を果たしたことは明らかである。

1814 年、平民学校(小学校)男子生徒への体操指導が義務付けられた。しかし、学校での体操に対して農民たちは強く反発した。「農作業の手伝いで毎日身体を使っているから、わざわざ体操のなどやる必要はない」と言うのが彼らの言い分であったが、別の理由もあった。それは、強兵のための体操が主であったためである。「国がおかれた状況から、強兵の必要性は明らかであった。そのために学校で体操を教える必要がある」と学校体操の支持者は主張する。しかし、農民代表は、「学校体操に対する農民の理解を得るには軍を改革する必要がある」と主張した。

当時の軍隊は、鉄の規律により無条件服従を要求した。上官による兵隊の虐待は日常のことであった。敵より上官を恐れるように兵隊を教練することをよしとした。このような軍隊の兵卒にされる農民は、軍隊を憎み、強兵のための体操教育も否定した。

### 3、国民啓蒙運動とフォルケホイスコーレ

啓蒙思想そして 18 世紀末に遂行されたフランス革命は階級思想を否定するものであるが、階級社会は 19 世紀に入っても存在し続けた。専制君主政体から部分的ではあるが民主主義を取り入れた立憲政体への移行、いわゆる 6 月憲法が承認されたのはパリで 2 月革命が遂行された翌年 1849 年である。

階級社会のもとでは、平民は自分たちを国民と意識しなかった。国民という概念は平民には何の印象も与えなかったのである。国の運

営はドイツ語やフランス語を話す官僚が従事し、平民には定められた職と階級生活があるのみであった。民主主義のもとでは国の主権は国民にあり、国民一人一人が自国を認識しなくてはならない。民主主義社会を築くためには階級社会の平民・農民意識を国民意識に改める啓蒙が必要だったのである。

19世紀前半の中・東欧を風靡した民族ロマンティズムの思潮は北欧の知識人をもとらえた。同じ言語を用いている人々は一つの民族をなしているのであり、国家を形成すべきである、と言う主張を多くの人々が支持した。これは、北欧民族としての一体性の認識を呼び起こし、北欧人の連帯を求めるスカンジナビア主義が生まれる要因となった。

当時のデンマークはデンマーク王国、シュレスヴィー公国、ホルスタイン公国そしてラウデンプルグ公国から成り立つ連合王国であった。ホルスタイン公国とラウデンプルグ公国の住民は皆ドイツ語を話していたが、シュレスヴィーとホルスタインの従属問題をめぐってシュレスヴィー住民を二分する紛争がおきた。シュレスヴィーとホルスタインの従属問題は二つのドイツ連邦国、プロイセン・オーストリアとの戦争を引き起こす原因となった。

そして、1864年にはデンマークはすべての公国を失いユトランド半島の半分つまりコング川以南すべてを失うという悲惨な状況に立たされることになった。これは、デンマーク国民はもとより、スカンジナビア主義を擁護する他の北欧諸国にも大きな衝撃を与えた。

このような時代にデンマーク最初のフォルケホイスコーレであるロイデイングホイスコーレがシュレスヴィー北端に開校した。1844年11月7日のことである。創立の第一の功労者はキール大学のデンマーク語と文学の教授であったクリスチアン・フローであるが、コペンハーゲンの国民自由主義者、グルントヴィー派そしてグルントヴィー自身もロイデイングホイスコーレの支援者であった。ロイデイングホイスコー

レはシュレスビー公国に住むデンマーク人のデンマーク化機関であった。教育思想のキーワードは、祖国、母国語そして国民であった。在学者は、考えることを学び、明確かつ上手に話し書くことを学ぶべきだが、重要なのは「国民的および民衆的な手法で教育する」ことであった。同一民族は一つの国家を成すべきであるとする国民主義は、シュレスヴィーに住むデンマーク人がデンマークに帰属することを求めた。初代校長ヴェナーは、デンマークとドイツの間が明確に区別されたときに初めてデンマーク人とドイツ人は互いに尊敬し平和に暮らすことが出来る、と主張した。1864年の敗戦によりロイデイングホイスコーレは新しい国境のデンマーク側に在るアスコウに移った。この敗戦はフォルケホイスコーレ台頭の重要な要素となった。後にデンマークに於ける体操の発展に重要な役割を果たすことになるヴァレキルデホイスコーレは1865年に開校した。

グルントヴィーは、1872年9月2日に没するまでの89年間に及ぶ永い生涯を通じ牧師・詩人・著作家・教育者・政治家としてデンマーク社会と人に多大な影響を及ぼした人物である。デンマークらしさは“グルントビー的”なデンマークを抜きにしては語れないと言われるほどである。このグルントビー的をあえて説明するならば自由な発想と討論と言える。グルントヴィーは、一つの国家と一つの国民は言語と文化の共同体を構成するものであることを強調した。そして、国民啓蒙には、デンマーク語が基盤をなし、言葉を使う「話と歌」が大切であると主張した。書かれたものは、「聞いたことを熟考する」時にその意味をもつ。心に触れるものだけが生きたものとなることができ、書かれたものはそれに適さない。書かれたものが話されるものよりも重要であれば、それはラテン学校と大学を通して広がり、文化への入り口を独占し、政治への参加から大多数の人々を締め出すであろう。このグルントヴィーの書き言葉文

化への反乱の重要な一環を成したのが「生きた言葉」、つまり話し言葉を重要な媒体とする新しいタイプの学校フォルケホイスコーレであった。彼の提唱するフォルケホイスコーレでは、平民は覚醒され、鼓舞され、啓蒙され「平民から国民へ」となることが求められた。

#### 4、射撃運動とボランティア体操の発展

軍隊以外の場で射撃技術向上を目的とした組織的な活動が始まったのは 1861 年であるが、1864 年の敗戦はこの射撃運動が発展する大きな要因となった。「南ユトランド(シュレスヴィー)の奪回」は多くの射撃協会の目標となった。これは、当時使われ始めた射程距離の長い後ろ詰め銃の命中率を上げることが戦力強化に直接つながったためである。

射撃運行を発展させたもう一つの要因は、階級闘争であった。部分的ではあるが民主主義を取り入れた立憲政体へ移行したのは 1849 年のことであり民主主義がまだ社会に十分に浸透しておらず、権力につながる国民武装に関して階級間に考えの不一致が存在した。グルントヴィーは、「軍隊は国民の一部でなくてはならない、国民から遊離する王の軍隊は廃止すべきである」と最も強く主張した一人である。彼は、奴隷のような兵役を廃止し、自由な国民武装をもとめた。一方、保守的なオフィサーや大農場主たちは国民軍につながる国民武装には慎重であった。王の軍隊を支持する保守派は射撃協会を、そして国民武装を主張する革新派は射撃隊を組織した。射撃協会では、軍隊の予備訓練組織として射撃訓練をするだけで戦闘教練は必要なしとした。一方、革新派は射撃隊を国民軍につながる予備組織と位置づけ、戦闘教練や体操も射撃訓練と併せて行った。この保守派と革新派の反発は 19 世紀の終わりまで続いた。

軍隊体操や学校で強制的にやられる体操ではなく、国民の自発的な努力によって発展した体操をデンマークではボランティア体操と呼んでいる。ボランティア体操は 1860 年代に射撃隊がその活動の中に体操を取り入れたことにその端を発している。当時行われていた体操は、ボランティア体操の父と呼ばれるヤーンの考案した鉄棒や平行棒などを取り入れたドイツ体操の影響を大きく受けたものであった。このような発展に伴って体操を主な活動とする体操協会や、冬は体操、夏はボールゲーム、ボート、陸上競技などのスポーツを活動内容とする体育協会が都市に出現するようになった。また、グルントヴィー派によって設立されたフォルケホイスコーレにおいても体操が盛んに行われるようになった。

#### 参考資料

1. Gyldendals store opslagsdog,1970: Gyldendalske Boghandel,Noesiak ForlagA.S.,Copenhagen,ISBN 87 00 32604 6
- 2.百瀬宏(1980)、北欧現代史、世界現代史28、山川出版社
- 3.武部啓、川井雄(1980)、科学思想史(改定新版)、南窓社株式会社
- 4.Lademannsleksikon,1981:Lademann Forlagsaktieselskab,Copenhagen,ISBN 87-15-06048-9 BD1-22
- 5.Ove Korsgaard,1982:Kampen om kroppen-Dansk idrats historie gennem 200 ar.Gyldendalske Boghandel,Nordisk Forlag A/S,Kobenhavn,ISBN87-0031168-5
- 6.オーヴェ・コースゴー著 川崎一彦監訳、高倉尚子訳(1999)、光を求めてーデンマークの成人教育500年の歴史、東海大学出版会、ISBN4-486-01476-6C1037